令和５年度 第２回 三島市青少年問題協議会　会議録

１　**開催日時**　　令和６年２月１日（木）　午後２時３０分～午後４時１５分

２　**開催場所**　　三島市民生涯学習センター３階　講義室

３　**出 席 者**

(1)会　　長　　豊岡武士三島市長

(2)委　　員　　森正晴三島警察署長代理深澤真美三島警察署生活安全課沼津地区少年サポートセンター三島分室責任者、竹林重行三島市教育委員、永倉えり子三島市社会教育委員長、高橋健二静岡県立三島北高等学校校長代理三井弘美静岡県立三島北高等学校教諭、鈴木久美子静岡県立三島南高等学校校長、石垣智博静岡県立三島長陵高等学校校長、長谷川光宏三島地区保護司会副会長、宮川紀代美三島市民生委員児童委員協議会会長、長島信行三島市民生委員児童委員協議会理事、永井明三島市 PTA 連絡協議会会長、鎌野史子三島市 PTA 連絡協議会家庭教育委員長、浅井由美子三島市交通安全保護者の会連合会会長、村松日出子三島市中央女性学級運営委員、相磯悦子いきいき友の会副会長、森章子三島市地域活動連絡協議会会長、上條猛ボーイスカウト伊豆地区地区委員長、宍倉睦美ガールスカウト三島地区連絡協議会会長、足立博道三島市スポーツ少年団本部長、小塚英幸三島市教育長、佐野文示三島市健康推進部長、水口国康三島市社会福祉部長、鈴木隆幸三島市教育推進部長

(3) 事 務 局　　若林光彦生涯学習課長、稲木修二女性青少年係長、渡辺美保子主任、武藤知之副主任、和田雪乃主事

４　**会議の公開・非公開の別**　　公開

５　**傍聴人の人数**　　１人

６　**委嘱状交付**　　従前の三島市教育委員安藤宏通委員が委員を退任され、令和６年１月１日付で委員に任命された竹林重行様に新たな委員をお願いし、市長より委嘱状の交付

７　**会長あいさつ**

会長である三島市長からあいさつが行われた。

８　**研修「若年層のひきもこりの理解と支援」**

講師：　静岡県精神保健福祉センター　猪又　準圧　主査

（以下、研修事項のため、割愛。）

続いて、質疑応答が行われた。主な内容は次のとおり

委　員

９０歳の方のところに６０歳の息子がいることを知らずに福祉的観点から訪問した際に「なぜうちに来るのか」と言われ、福祉総務課や地域包括支援センターにつないだことがある。解決を急ぐのではなく、少しでも早く支援につなげること、話を傾聴し、次に回すこと、家族がフォローすることが本当に大切だと思う。

講　師

８０５０は外部の支援が入ると本人が不安定になったり、長年の均衡を崩すようなことがあることを考慮しなければならないが、お父さんやお母さんが認知症が進行したり、施設に入ることになった時等ライフステージに変化がある時には支援に入らざるをえない。

包括の方と福祉の方が連携し、介護のスピード感とひきこもり支援のスピード感を理解し合い、事前に本人に説明した上で外部機関が入る等様々気にかける必要がある。

本人が５０～６０代という方も珍しくないため、現実的なサービスを入れていくためにどのようにしていくのかが大切である。本人のニーズについて本人がやれることを尊重し、本人とコミュニケーションをとれるようになればいいと思う。

民生委員と包括の連携の話を聞いたので、心強い。行政の立場からいきなり家庭に理由もなく入ることはできないので、ぜひ包括から市や県の行政に連携がつながっていくといいと思う。

委　員

犯罪に陥った方々の保護として、自分が役に立てなかった、家族の期待が大きすぎて、そのギャップの中で生きてきたというところで犯罪に陥ってしまったという方々を、社会貢献活動として草取りや窓ふき等を行うことにより、自分が社会の一員として役に立てるという実感を持たせ、だんだんと社会とのつながりを持ってもらうという活動がある。

家庭環境において、親として子どもがどういう心理状態でいるのか、自分が親としてどのように子どもと関わっていったらいいのかということが心配だと思う。地域や行政とのつながりの中で、子どもをできるだけ心配のないように、社会で自分の存在感を持たせたいというように思い、活動しているが、よろしいか。行政とのつながりを教えていただきながら、やっていきたい。

講　師

犯罪を犯した後の方のお話があったが、ひきこもりも他の依存症もやはり孤立が問題である。自分の役割はない、あるいはレッテルが貼られた後に復帰先がない、家族も受け皿になっていない時に本人は大変辛い状況になる。社会の受け皿として、定期的につながれる、話せることが救いになる方もいらっしゃると想像する。

孤立との関わりは行政等がどちらかにバトンをパスするというよりは複数の機関が

そこの方あるいは家庭を知っているという状況をつくっていけるといいと感じた。

各圏域の担当者が集まってひきこもりについて話し合う時に、福祉と教育の間でどうやって連携していくかという話題がとても沢山出た。不登校がこれだけ沢山出ているのに中学を卒業した瞬間から追えなくなり、その統計もなく、関わるのは教師の熱意でしかない状況になってしまう。受け皿としての高校も十分には引継ぎできないので、その後その方達がひきこもりという状態になってしまうかもしれないことを感じても、三島市のこういうつながり、この場が大切だと思う。

三島市の行政もいろいろと連携を作っていると思うが、私のいるセンターを含めて皆さんと連携しながらということをより感じた。

委　員

親としては子どもを早く立ち上がらせるべきとか、当事者は働くべきだがそれができない自分は価値がないというようなとらわれは、専門家の方が関わりながら対処できるが、ひきこもるのは親が甘やかしたからとか大人が働いていないのはおかしいというような世間のとらわれを変えていかないと解決していかないと思う。世間のとらわれを変えていくのに有効な手段があれば教えていただきたい。

講　師

世間を変えるのは時間がかかる。一番は講演を行う機会を持つことである。昨年度、今年度になって各市や町レベルでの講演会が増えている。国としてもいろいろなイベントをやっているが、各市町でもひきこもりや不登校について関係者で集まったり、あるいは一般の人向けに地道にやっていくことが底上げにつながる。あとは広い広報活動や相談しやすい窓口づくりやホームページを綺麗にする等がある。そして、ひきこもりについて何とかしたいと思っている支援者が前線にも中堅にも上にもいるような状況を作っていく必要があると思う。

組織が違っても孤立孤独対策において共通点が見つかるのではないか。そこの壁を超えることが大事である。

世間のとらわれについては、専門家が話さなくても変わると思う。ひきこもりを受けた地域の方等がひきこもりや相手のことも考える視点で、話していいんだというようになってほしい。このようなことをいろいろな人が知って、輪を広げていくことも大事である。ひきこもりＵＸ会議で当事者が沢山の声を出しているので、行政もそれをキャッチし、そのような方を呼んで講演したり、そのような方を入れたイベントをする、話をするプラス当事者もいる、その後相談会がある等、世間のネガティブなイメージやとらわれを払拭できるような方法を考えていくということを積み重ねていくしかないと思う。

９　閉会